蛭田亜紗子
asako hirota
人肌ショコラリキュール
chocolat liqueur
講談社文庫

講談社文庫

常州大学図書館
藏書章
入庫ヨコヤリキール

蛭田亜紗子

講談社

|著者| 蛭田亜紗子　1979年11月28日生まれ。札幌市出身・在住。広告代理店勤務を経て、2008年に「自縄自縛の二乗」でR-18文学賞大賞を受賞、'10年に『自縄自縛の私』と改題してデビュー。同作は'13年に竹中直人監督により映画化された。近作に『星とモノサシ』（マーブルブックス）、アンソロジー作品『文芸あねもね』（新潮文庫）、『10分間の官能小説集2』（講談社文庫）などがある。10月には単行本の最新刊が刊行予定。

人肌（ひとはだ）ショコラリキュール
蛭田亜紗子（ひるたあさこ）
© Asako Hiruta 2013

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

2013年9月13日第1刷発行

発行者——鈴木　哲
発行所——株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話　出版部（03）5395-3510
　　販売部（03）5395-5817
　　業務部（03）5395-3615
Printed in Japan

デザイン—菊地信義
本文データ制作—講談社デジタル製作部
印刷———豊国印刷株式会社
製本———株式会社国宝社

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277629-5

目次

あなたモドキ　7
ヴォルフガングとそのほかのこと　41
サーティーデイズ、ワンクール　75
ストロベリー・イン・ナイトメア　109
リコちゃんの暴走　141
ふるえる口蓋　173

講談社文庫

# 人肌ショコラリキュール

蛭田亜紗子

講談社

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

目次

あなたモドキ　7
ヴォルフガングとそのほかのこと　41
サーティーデイズ、ワンクール　75
ストロベリー・イン・ナイトメア　109
リコちゃんの暴走　141
ふるえる口蓋　173

# 人肌ショコラリキュール

あなたモドキ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

玄関ドアを開けると、トマトとチーズと小麦の焼けるにおいが鼻腔をくすぐった。「ただいまー」と廊下に向かって声をかけ、脱いだパンプスを揃える。ストールを首から外してハンガーにかけていると、背後にひとの気配を感じた。振り向いて、はっと胸がつまる。うなじに歓喜の鳥肌が立ち、いとおしさが指のさきにまで満ちて震えて、持っているバッグを落としそうになった。

笑顔のかたちに開いている彼の口がぱくぱくと動いて、私になにごとかを伝えている。そうだった、イヤホンをしていた。あわてて携帯音楽プレーヤーのボタンを押して再生を停止し、イヤホンを耳から外す。開放された鼓膜に容赦なく突き刺さったのは、男性のわりに甲高い声だった。

「――優子、このあいだそう言ってただろ。食べたいって。だから今晩はピザにしたよ。生地を寝かせなくてもいい短時間でつくれるレシピをさがして、トマトソースも完熟トマトから手づくりで」

嬉々として話す彼の声を聞いていると、水に墨汁を垂らすみたいに黒い失望が胸に

じわじわ広がっていく。そうだ、これは将吾だ。大我じゃない。大我がうちにいるわけがない。まじまじと目の前の顔を見る。こんなに似ているのに、別人だ。

「手づくりピザ？　嬉しい！　昼食少ししか食べてなかったから、おなか空いてるの。すごく楽しみ」

わざとらしいほど弾んだ声でそう答えて寝室に入り、ため息をひとつ吐く。のろのろと部屋着であるパイル地のワンピースに着替える。洗面所でメイクを落とし、それから缶ビールでも出そうと思って冷蔵庫に向かった。

「ケーキもあるよ。あとで食べよう」

オーブンを監視している将吾が声をかけてきた。冷蔵庫の扉を開けると、人気ケーキ店の紙箱が奥に鎮座している。

将吾は食べさせるのが男の甲斐性だとでも考えているふしがある。あるいはおいしいものさえ与えておけば、女の機嫌は保たれると思っているのか。

「きゃー、パティスリー・サトのケーキだ！　ここのガトーショコラって濃厚でおいしいんだよねえ。うれしいけど、でも太っちゃいそうで怖いなあ」

冷静な内心を隠し、過剰にはしゃいでみせる。

「いいよ、ちょっとぐらい太っても」

「うちの服って細身のデザインが多いから、太ったら着られなくなっちゃうよ。今日だって店長に『彼氏と同棲してから体型変わったんじゃない？　幸せ太り？』って厭み言われたんだから」

私はファッションビル内のアパレルショップで働いている。

「実際、幸せ太りなんだからいいじゃん。店員が少しぐらいぽっちゃりしてても、べつに問題ないんじゃない？」

「駄目だって、うちは男受け第一の愛され服を売ってるんだから。おデブな店員がいたら、お客さんも現実に戻って購買意欲を失っちゃう」

くちびるをきゅっと尖らせて、甘えた声で言った。

「そういうもんかねえ。あ、ピザカッター出してくれる？」

そう頼まれても、私はピザカッターがどこの引き出しに入っているのか知らない。キッチンは完全に将吾の基地だった。とりあえず目についた引き出しを開けてみるが、案の定見つからない。おろし金、シリコンのスパチュラ、味噌こし、くるみ割り。私の住まいでもあるのに、いつ購入したのか知らないキッチン道具がみっちり詰まっている引き出しを凝視していたら、ふつふつと怒りのようなものがこみ上げてくる。

家事をいっさい手伝わない男性と暮らしている女性に比べれば、私はとても恵まれていると思う。自分の不満なんて、贅沢だと一笑に付されたりそれどころか怒られるようなことだとわかっている。でも、将吾を前にすると、自分の地位が奪われたような気がして情けなくふがいない心持ちになるのだ。なにもできていない自分自身に苛々し、その苛立ちはまわりまわって将吾に向かう。われながら理不尽きわまりないとわかっているのだけれど。

「知らないよ、ピザカッターのありかなんて」

つい、とげとげしい声になってしまった。

「そんなかりかりするなよ」

将吾はやわらかくそう言って、焼き上がったピザのはじを私の口に押し込んだ。大我に似た顔が間近に迫る。うっとりと見つめ、ピザを噛みしめた。トマトとバジルの味が口のなかに広がる。モッツァレラチーズがとろけて舌に絡む。

――以前に食べたいと言っていたのはマルゲリータじゃなくて、アンチョビの塩味が効いたピザだった。よく似ているけど違うものしか、いまの私は手に入れられないのか。

「優子、ここが感じる？」
「もっと声出して」
「ああ、すごく肌がやわらかい」
ベッドに入ったあと。将吾は私の躰のあちこちに手を伸ばしながら、熱に浮かされたように言葉を発し続ける。その声は、黒板を引っ掻く音みたいに、不快に私の聴覚をかき乱す。
少し黙ってくれ、と言いたくなった。しかしそう口に出すかわりに、両手を将吾の首のうしろにまわし、顔を引き寄せた。目蓋を開けたまま、ついばむようにくちびるを味わう。口を口で制したままじっと見つめる。これは大我なのだ、そう自己暗示をかける。わずか数ミリさきに大好きな瞳。睫毛。眉間。口を塞いでしまえば、将吾はこんなにも大我に近い。鼓動が速くなっていく。頬が熱い。子宮の奥から指さきまで、甘い痺れが駆け抜ける。
見とれているだけで自分が熱くうるんでいくのがわかった。はあ、と荒い吐息がこみ上げてくちびるを外してしまったけれども、将吾はもう無駄口を叩かない。指をティースプーンのようにして私のあふれている部分をくるくるとかきまぜ、砂糖を溶かすかわりに蜜をこぼれさせる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com